

## 第 10 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 10 月 24 日（月）午後 1 時 00 分～午後 4 時 00 分

2 場所 長野県伊那勤労者福祉センター 第二会議室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	丸茂 貴子委員
小坂 樫男委員	小池 博委員
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（池上委員長）

皆さんこんにちは。それでは、第 10 回の委員会を開催いたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

例によりまして、事務局からのご報告がありましたらお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

はい。よろしくお願いいたします。

普段、各推進委員会の様子をご報告しているわけですが、この推進委員会の第 9 回から今回の 10 回までに他の推進委員会は開催されておりませんので、それについては、省かせていただきます。それから、本日議事の参考として事務局が用意いたしました資料はございませんので、これも省かせていただきたいと思います。

それから前回の中で、ご質問がございましてそれについては口頭で答えさせていただきたいと思いますが、多部制・単位制課程と全日制課程の併置についての課題等についてのご質問だったと思いますが、申し上げたいと思います。

多部制・単位制と全日制との併置の場合、体育関係の施設、一般教室等の施設の共有により、時間割展開や単位管理等に制約があるということがございます。そして、独立校とすることで、いろいろな施設、一般教室、体育館等がございしますが、その共有状態が解消されることから、時間割展開並びに課外活動の幅が広がって教育活動が充実させることができる、このように考えております。

全日制と多部制・単位制とが同一校舎で使う場合、課程が異なるために生徒の一日の生活リズムも日課も異なりまして、時間割展開が非常に制約を受けてくるということがあります。

日課が異なることから課毎のチャイム、校内放送はできなくなります。多部制・単位制課程が独立校舎で設置されることで、生徒の学校生活にその一定のリズムおわれるのではないかとこのように考えております。

全日制と単位制・多部制が併置された場合、課程が異なることから年間を通じて学校行事などの活動がさまざまな条件の下で行われ、文化祭、運動会クラスマッチ等の計画等に

制約が多いということがございます。例えば、全日制が平常授業、多部・単位制がクラスマッチということになりますと全日制の生徒が落ち着いた学習環境の中で学習できないのではないかとございます。

多部制・単位制の独立校とすることで制約する諸条件が少なくなり、学校行事の計画運営が比較的円滑に行なわれる。そういうこととございます。以上でございます。

## 5 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。今日は、いよいよ今までいただきました結論の中で、一番困難なところだと思いますが、いわゆる7、8、9の各区について一校減ということについて、具体的なお話し合いを中心としてやっていただきたい。そのように思っています。

ただし、その前に、各委員につきましては、視察等を実施をいただければ、このご報告をいただきたいというのが1つ。それから、3人の委員から関連するテーマについて、ご意見をいただいておりますので後段のところに関連してまいりますから、そのご意見を拝聴したいと思います。その意見を先にやらせていただいて本題に入りたいと思います。

まず、委員の視察でございますが、先般、高遠高校を視察させていただきました。副委員長と私の2名でございましたが、副委員長から状況報告をお願いします。

(笠原副委員長)

11日でしたか、第9回の会合のあと委員長と私ども2人で高遠高校へ行ってまいりました。かつて、だいぶ昔になりますが高遠は私も勤務していたことがあるのですが、その当時から学校全体が騒然としているような雰囲気も感じていたわけですが、この間、訪問した際の第一印象としては、昔と比べて学校全体がたいへん落ち着いた雰囲気、特に騒然とするような場面もなく、授業が進められていたように思いました。

もめるような生徒が多少いたことはいたわけですが、全体としては非常に落ち着いた雰囲気、授業がされており、3学級を4講座編成にして授業ということでしたので、授業そのものは比較的少人数での展開であったわけですが、コース制を引いておりまして、進学コースと福祉、芸術、経理・情報の4つのコースに引かれているわけですが、このコース制が引かれてから生徒が非常に目的意識をもって学業に専念するようになってきたと、そのように校長先生はおっしゃっておられました。

特に、芸術関係では地元と関わりのある大学の先生による指導等もあって、その成果は非常に顕著だとコース制を引いた成果を述べられていたように思います。簡単ですが以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。期日が前後いたしますが、先般伊那北高校で生徒会と県の教育委員会とで討論がございました。その対応について、事務局からご発表ください。

(野村主幹教育支援主事)

はい、お願いします。

一昨日になりますが、10月22日の土曜日の午後でございますが、県下およそ20校から高校生およそ200名ぐらいが伊那北高校に集まりまして、高校改革プランについていろいろな意見を出していただきました。

質問あるいは意見という形で詳しくやりました。県のほうからも5名参加して質問等があると高校生は非常に活発な意見を出していただいたと思います。詳細につきましては生徒さんのほうで纏められてまたご報告があると認識しております。以上です。

(池上委員長)

はい。ありがとうございます。あと、東伊那一部を視察等いたしましたのですがその点についてご報告を申し上げてほかの皆さんのところで配りながらその後運営したいと思います。

先般、上農の同窓会および父兄会のみなさんからご要請がございまして、テーマは「定時制の存続」でございます。先生方、それから父兄会、同窓会のみなさん100名ぐらいご出席がございまして、そのなかで議論がありましたのは、ご出席の皆さん方のそれぞれのみなさんの認識の違いがあると思いますが、たまたまおいでになりました父兄の皆さんは、最大の問題だといったのは、「私の子どもの居場所がありません」というお話であったと私は思いました。

特に中学の教室でほとんどは欠席がちであった生徒さんがこの学校へ行くことによりましてほぼ皆勤ということでしっかり居場所ができて高校を卒業することができる。というふうなお話がございましたので、そういう側面は確かにあります。また、いろいろな報告書等にもついてはですねそれは間違いはないというふうに思います。そのなかでも、それでは通学する距離については、新しい制度を活用すればこれまた逆に多少のご不便はいただいてもですね、むしろいい学校ができる方向のほうがいいのではないかというふうな認識をもっておりましたが、たまたまその父兄がその子どもさんの方々でございますけれども。

次の28日でございますが、もう1回時間等もありましてお打ち合わせいただくということになっておりまして。また、それがありましたらご報告は申し上げてというふうに思います。

それから、駒ヶ根工業でございますが、これは公開授業がございました。通常の授業についてはですね、他校とそう差異があるのではないというふうに私は見ております。

ただ、中には他の学校で見られる授業を無視して睡眠を取るという生徒がおったのですけれど。この学校の場合は、ほとんどそういうのはない。以上でございました。

それで実習なのでございますが、これは非常に活発ということに多少は見受けられました。

たまたま伊那北高校の子どもたちとですね、共同でいろいろやっていたので、その授業を見学させていただきました。これは真剣にやっております。ということと、明るい授業ぶりだなということを私は感じました。

それから長姫高校でございますが、先般やはり公開授業がございまして、これを見てま

いりました。商業は大体諏訪実さんと同じ内容の教育をなさっているのかなというふうに思っています。

ただ、特徴は建築、土木という授業がございますのでそれをどう評価していくのかということだと思います。

長姫の中でも、明らかにいわゆる商業の皆さんと土木建築の皆さんは生徒の質が違うのかなと感じました。というのはいいとか悪いとかというのではなくて、気風が全く違うということを感じました。

または、これは総合学科のこれはありだなと私は思っております。

もうひとつ、今日は諏訪の議論をさせていただきたいと思っていますので、諏訪の地域は一巡をさせていただいて、これはもう先生方にお会いするというよりは位置関係を確認するというきわめてレベルの低い話でございますが、富士見高校から岡谷南まで、すべての学校を見せていただいたということで、これはほとんど歩きではなく、車で走るというだけですみませんが、確認をさせていただいた。ただ、学校の位置関係からみてこの学校とこの学校がどういう位置にあるかということだけは私も理解できるという範囲でございます。それはもう皆さんの方が先刻ご承知なっておりますことです。その中で富士見高校でございますが、評価をしてやりたいのですが、ほぼ同じ位置にあるのかなというふうに思っています。ただ、交通の利便性はこちらの方が少し高いのではないかなというふうに思っております。以上がこの間でそれぞれの学校を訪問させていただいた報告でございますのでよろしくお願いしたい。こういうふうに思っています。

それでは、先ほど申し上げましたように今日の議論にも出てまいりますので、先に提議をいただきたいというところもございますが、お三方からそれぞれ文書でご意見をちょうだいしておりますので、それでは小林委員の資料からお願いしたいと思います。

ちょっと私のほうから申し上げますと、これはたいへん示唆に富んだ重要な問題を内在しておりますので、中学生の保護者または中学生の、例えば多部制・単位制に対する認識というふうな、まだそういう数字にあるのだなというふうに私は捉えておりまして、これは相当もう時間が長いわけでございますが、たいへん貴重なデータだというふうに考えております。それでは恐れ入ります。

(小林委員)

ではお願いします。私がお話するのは高校改革についての意識調査結果というものです。

この前にも、質問したのですが、多部制・単位制、それから総合学科について、中学生、特に今の中二ですね、一体どのような意識でいるかということについてどうしても把握が必要だと思います。前に県教委で生徒の調査をした経過も私は知っていますが、どうもそれは直接は今回のことにはなかなか結びつかないかと思ったので、この前アンケートをお願いということを言ったわけです。しかし、とても今の段階でいくら抽出でも県全体でとても無理だということでしたので、非常に制約はありますが、私個人で一応傾向をとにかく知りたいということで、以下のようなアンケートを取ったわけです。これはあくまでも多部制・単位制高校、それから総合学科高校について今後の高校改革の実際の開始時期に当たる中学2年生がどのようにとらえているのかということ調べたわけでありまして。

中学名は言わなくてもわかると思いますが、ちょっと控えさせていただきますが、この

中学は上伊那のある中学2年生で、仮に多部制・単位制の学校がどこに設置されるにしても通学範囲の可能な地域であります。総合学校も同じであります。生徒数は174人でありますので一応はデータとしては参考になるかなと思います。お配りした資料の最後の位置に裏側と一枚目ですかこれがアンケートの用紙であります。これは時間がないから割愛させていただきますが、これは複数回答ですのでよろしく願います。したがってパーセントで括弧のところへパーセントを示しましたが、それはその項目ごと数が違いますので回答数合計でパーセントは出してあります。

まず、多部制・単位制高校のイメージをどういうふうに子どもたちはとらえているかということで、ここに から を見たわけであります。それからあとも、時間がもったいないものですから、調査結果についてはこの状況ということだけにとどめて考察のほうをちょっと中心にしたいと思います。次のページの大きな二の1です。

まず、多部制・単位制については、多部制・単位制高校って一体どんな高校かということとは、理解されていないまたはイメージさえ沸かない生徒が6割を超えていると、このことから考えますと、ただ一般論でこういう学校だということだけでなく、少なくともこの推進委員会で3通学区独自の多部制・単位制高校の構想を示さなくてはいけないのではないかなと思います。

それは実際には県教委が現場に示すことになりますが、私のほうには、どの学校にこれを設置するかというよりも、どういう構想をもってわれわれが望んで行くかと、それによって具体的に、ではどの学校にという話にしていけないとまずいかなというふうに思います。1の(2)ですが、従来の定時制と変わらないと思っている生徒が非常に多いと思っていたら、これが意外と非常に少ないということが救いでありました。

(3)をみますと、多部制・単位制高校を魅力ある学校づくりの方向性を示せば、さきほど言った一の1は6割が知らない、イメージも持っていないということにも関わらず、しかし、こういう方向性を示すと逆に約7割の生徒は、行くかどうかは別として、この学校を進路選択のひとつとして考えて検討したいと、こういうことがわかりました。特に(4)ですが、 から の内容は、充実すればある程度の生徒の志望が予想されると思います。ちょっと、調査結果を元へ戻って審議いただきたいのですが、一の2の から というのは、単位制なので は自分の志望する実習計画を立てられる。それから、 は午前部、午後部、夜間部のどれかを選択できて一日の残った時間は計画的に工場や農場に出かけて履修科目実施して学びたいとそれを単位に認められる。それから 、午前部、午後部、夜間部の3部どれかを選択して一日の残った時間は、計画的にボランティア活動をしたり教育活動するなどして、履修科目を実施で学びそれを単位として認められる。これが認められるというのを、ここではっきり打ち出すのはちょっと問題もあるわけですが、一応構想としてですので、これが可能かどうかということは二の次ということにしていきたいと思います。

そして の「単位制なので進級はないが3年間で決められた単位を取れば卒業できる。」も含め、それを合計すると関心のある数が、かなりの数になります。そういう意味であります。

次はまた、考察の二の1(5)ですね、戻ったりして申し訳ございませんが、 というのは今の定時制のマイナス面になると思いますが、どれかの部は選択して、あとの残った時間

は自由に過ごせると、いわゆる一日の半分だけ勉強すればいいから後は気楽にやりたいと。こう考えている生徒は意外と少なかったです。しかし、おそらく単位制・多部制にした場合にこういう生徒が入学してくると、少数であってもそういう可能性は十分あると考えたほうがいいと思います。

(6)ですが、今度は一方 ですね、 というのは、「中学の学力がついていないので、少人数クラスで丁寧に教えてもらえる。」と、これも少ないですが17人、まあ、少ないですけども、ここの生徒が入学してくる可能性は非常に私は高いかなということで、設置内容の中にやはり少人数学習の、従来の定時制のよさを活かしていく必要がありはしないかということでもあります。

次に、総合学科の統合についてですが、実はこの中学は志学館に非常に近いわけであります。にもかかわらずどんな高校が理解していない、またはイメージさえわからない生徒が5割を越えている。非常にこれは意外でありました。われわれは単位制・多部制はあまり子どもたちわかっていない。総合学科はよくわかっているというふうに、そういう私の大人のイメージでいたのが大間違いであったということでもあります。すでにあるにもかかわらずです。

それから二の2(2)ですが、「総合学科にはこういうものを望む」というのが、この調査結果の一の4にあります。総合学科高校の内容について、ここで全部で6項目示してあるわけですが、そういうことを示されてもなおかつ、総合学科の高校を検討さえしようとしないう生徒、つまり、「 の上記のどれも関心がないため検討するつもりはない。」という生徒が4割もいるということを見ると、どうもただ志学館のような学校をつくれば子どもが大勢集まってくるというふうに簡単には考えられないのではないかと思います。

だから、本当に総合学科もよく検討して設置しないと、いけないと思いました。それから(3)ですが、無学年制のことは非常に意識が薄いわけであります。進級というのがないということが無学年制であるということは多くが非常に理解されていないと私は思うのですが。もし、このことがきちんと理解されて、無学年制というのは、いわゆる学級が同年齢クラス、普通の全日制ではごく当たり前のそういうのでは違うということがわかったときに、どういうふうに考えるか、マイナス面であるところも考えていかないといけないと思います。

それから、括弧の最後ですがこの調査結果のですね、 に「大学進学などの力をつけるために進学系高校よりも幅広い科目選択ができるということ。」これも多くはありませんけれども、結構な生徒がいたという事は、従来の志学館みたいなケースだけではなくて、そういう他県ではこういうことをやっているのか現実にはどうかよくわかりませんが、そういう学校がかなりあることにはありますので、そのことを含めて今後検討する必要があるのかなと思います。これ、ほかのところでも同じようなこと調べてもらおうとさらに、このデータが特殊なのか、ある程度だいたい今の中2の生徒がそんな傾向があるというのがわかるので、そんなことをほかのところでも調べていただければと思います。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。ちょっと教えてもらえますでしょうか。

その最後のページの下から2行、「3」でございますが「マイナスイメージのことが考えられる。」というのは、これは具体的におっしゃるのはどういうことでございますか？

(小林委員)

今の生徒というのは全日制、中学もそうですし、小学校も全部同じ同年齢の生徒の学級ですね。で、今度これが実際どういう展開になるかわからないが、つまり進級がないということは、いろんな年齢の人が集まる学級になりますね。学級が同じ年齢ではなくて2つくらい上とか3つくらい上の方と一緒に集団になるということがわかった時に、こういう中で本当に子どもたちが生活できるのか？こういう心配がある。そういう意味です。

(池上委員長)

ありがとうございました。この点については、もともと県のほうからも見解をいただきたいと思いますが。その前に皆さんのほうでご質問ご意見をございましたらお出しただけであればありがたいです。

(小池委員)

いいですか。

我々が事前に多部制・単位制や、総合学科等について、通常の進路指導の中で指導している事以外に中学校でそれを学習して、回答をしたものなのか？中学校の段階で言えば、ポッとこの回答がでたものなのだろうか？その根底は、理解の程度はどうなっているのか？多くの生徒それに保護者がこの制度についての細部の意味がわかっていないということと、今度のこの場合、誰もが、このことについて視野に入っていないということがあると思います。そこの所をちょっとお聞きしたいと思います。

(小林委員)

ちょっと小池先生の質問非常に大事なことだと思います。

正直言うと、そこまで私が確認してアンケートはお願いしてありません。ですから、もしかしらある程度のところまでやってあるかもしれませんが、昨日頼んで一週間で纏めてこちらへ頂きたいという話をしましたので、多分きちんとしたものを進路学習というものはしていないと思います。相当時間がかかりますからね、やったとしてもある一部しかしていないというそういう中での子どもの意識であると思います。

(池上委員長)

ほかによろしいですか。

それでは、私もちょっとこだわっていたのですが、従来県では長期にわたって特に単位制・多部制は議論もあったと思いますが、そういう認識は必ずしも子どものまでは至っていないかなということを私は正直思っています。県のご見解をちょっと聞きたいと思います。

(柳澤教育主幹)

多部制・単位制に関わって、あるいは総合学科についてのイメージなどの各学校に浸透していないというようなお話がございましたが、実は昨年検討委員会から中間まとめが出されたおりに、小中高それぞれの全ての家庭に届きますようにということで概要版を 30 万程作成し各家庭にお配りしました。それからまた、各小中学校、高校のほうには必要があればこちらからご説明に上がりますということで 20 校程度は訪問してお話をし、また、いろいろご意見を伺ってきたというようなこともいたしました。また、旧 12 通学区毎に地域懇談会を開催しまして、多部制・単位制、総合学科等を含めましてご説明申し上げ、またご意見もお聞きしたいというようなことはしてきております。

今の総合学科のことにつきまして中学生が余りよくわかっていないというようなお話を伺いましたが、おそらくそのアンケートをとられた中学校からの進路の中に、今塩尻志学館が 1 校しかありませんので、その塩尻志学館にどのくらいの生徒さんが行かれて、自分の周り或いは兄弟、そういう方が志学館の方に行っているとするところある程度の認知がされているということもありますが、現在総合学科は志学館 1 校ということでございますので、県下全部、それぞれの地区に中にありませんから、中学の生徒さんたちの頭の中にも選択肢にはなかなか入ってこないというところがあるろうかと、そんなふうに思っております。

それからもうひとつ無学年制のことで今お話ございましたけれども、これも例えば多部制・単位制のことを考えてみますと、いろいろなクラスの設定の仕方というのがあるろうかと思いますが、例えば 0 単位から 20 単位まで持っている生徒さんを 1 つの集団にするとか。20 単位を越えて 30 単位までを持っている生徒さんと、そういったこの単位数の幅に応じて集団を組むというようなこともひとつ考えられるだろうというふうに思いますが。

そうしますと、大体中学から直接この多部制に入ってまいりますと、0 単位ですから大体同じ集団で HR を形成できるというようなことはあるろうかと思いますが、ただ、学年制でございませぬので当然いわゆる全日制の学校よりは年齢幅もいろいろあるということは考えられると思います。総合学科についても単位制をとっておりますが、志学館の例を見てもわかりますように、概ね同年代の子どもたちで通常的全日制と同じような形でのホームルームというようなことになっています。

(池上委員長)

ありがとうございました。

(小林委員)

ちょっと今のことですが。この中学は志学館が開設されてから、人数はきちんと私把握してはおりませんが、昨年度末も何人が進学しております。全く意識の外の学校ではないと認識しています。



(池上委員長)

はい。他にありますか？

この辺2つの学校についてではですね、もともと検討を依頼された時に多部制・単位制、総合学科をそれぞれ通学区に1校配置をしたいということでありましたので、またその議論の課程でも結論いただいていますので、その結論に沿っていきたいですが、さすれば今度、「魅力ある」というところでしっかりそれをフォローさせていただくということに相成ると思いますので、そのときのそのおりにはよろしくお願いしたいと思います。大変重要な提案であったと思います。ありがとうございます。

それでは続いて12ページですね。藤本委員からご提案をいただいております。この意味は総合学科の魅力論だというふうに私は受け止めますが、これはその時に今申し上げたことは大変重要でございますので、このことについてご説明いただければありがたいです。

(藤本委員)

「いろいろな総合学科」というプリントをご用意しました。なぜ用意したかといいますと、前回北原委員さんをはじめ、各委員さんが普通科を総合学科にしたほうがいいのか、職業科を総合学科にしたほうがいいのか、いろいろな議論されたと思います。

それで、全国に今240あまりの総合学科があるのですが2ページからですが、落ち度があるかもしれませんが全ての総合学科をチェックしてみましたら、2ページの左、学科というところですが、総合学科の単独校というのはもちろん非常に多いわけですが、前回普通科を変えたほうがいいのか、職業科を変えたほうがいいのかかなり議論されたが、単独校ではなくていろいろな科を併設している学校が20パーセントあるというのが全国の実況です。

具体的な数、17、17、7、41というのは、多分数校のミスはあるかと思いますが、ほぼこのくらいの数ではないかと思います。総合学科と普通科が一緒になっている学校が17校、普通科と職業科が一緒になっている学校が17校、総合学科と普通科と職業科が一緒になっている学校が7校、全部で41校、全体200数十校の約20パーセントということです。残りの80パーセントは単独校であり、圧倒的に多いのは事実です。

なぜ、他学科を併設しているかという理由ですが、全部電話で聞くわけにもいきないので、何校かに電話で聞いたので、そこに併設している理由を書いております。職業科を併設している総合学科の場合は、やはり転換前は非常に伝統ある職業高校だということがわかりました。したがって、・1にありますけれど、転換前は伝統ある職業高校ですので、やはり地域との結びつきが非常に強い、・の2番目はやはり専門教育を確保したいという理由でした。一方普通科を併設している総合学科の大きな理由は、大学進学のために特進型の普通科を目玉にしておきたいということです。2、3の学校に電話で聞きました。秋田県の益田高校の教頭さんがかなり親切に話してくれたものです、創立11年目の総合学科ということですので、初期の最初の総合学科ですが、この学校は農業をメインとした伝統校であり、家政科、普通科も転換前にはあったそうです。

非常に地域との結びつきが強く、農業科の先生方も非常に多い点もあり職員の反対が非常にあった、ぜひ農業科を残してと、それで併設になったそうです。つい最近学級減の議論があったが総合学科を学級減にしたということです。ここまでよく話して下さったと思

ったのですが、教頭さんが一言、総合学科ですが専門性を維持するために実を言うと生徒があまり他の系列の授業はできるだけ受けられないように、要するに生徒がふらふらしないように、他の系列を受けられないように指導をしているとちょっと話されました。

それで、2 番目は、全国的には数が少ないのですが、ホームページを見てみるとボツボツあるのですが、あらかじめ入学段階で系列を決めて入学するという総合学科です。総合学科というのは普通は一括募集する。系列は別にコース制ではないわけです。一括募集を行わないで系列ごとに生徒募集を行うわけで、もうコース制に近い総合学校ですね。ひどいところは系列という名前を使わない、コースとこころがあり「えっ」と思いました。3 ページの上です。これは飯塚高等学校ですが、電話で確認したかったのですが、時間が無かったので、ホームページでは、IT ビジネスコース、総合実務コース、健康スポーツコースで 30 名募集となっています。

それから 3 ページの 4 番ですが、入学時には一括総合学科として募集する。これは一般的なのですが、2 年次に系列を選ばせる。県教委から話がありましたが、系列というのはコース制とは違い、あくまでも学習の目安ですので、生徒は系列を選ぶとか系列に属するということは一切なく、科目を自由に選択するわけです。大牟田高校ですが、大牟田工業高校が多分母体になっているのだと思うのですけれども、工業の伝統校であった、したがって工業科プラス総合学科ですけれども、総合学科では 2 年次で系列を選択させてしまうのですね。私も電話で聞けばよかったのですが、選択させておいて他の系列が選べるのか、選択したら選べないのか、電話で確認しませんでした。これら 2 つは特殊なケースかも。そうはいっても専門性をなんとか維持したいから、校ではない学校が 20 パーセントもあるということが 200 いくつかの総合学校をチェックして分かりました。前回普通科、職業科のどちらかが議論になったので提案しました。

(池上委員長)

ありがとうございました。また、多くの情報ありがとうございました。

この件について、ご質問ご意見ございましたらよろしくお願いします。

(小林委員)

2 点ちょっとお聞きしたいのですが。1 点は 2 ページの「2」、職業科を併設して総合学科と、これは非常に注目されることなのですが、その場合の総合学科というのは単位制であるのかないのかということ、さっきの併設はいろいろ問題があるってありましたのでね。単位制かどうかということをお伺いしたいのが 1 つです。

2 つめは、その総合学科と多部制・単位制をセットにしている、そういった学校はあったかどうかその 2 つをちょっとお願いします。

(池上委員長)

ではお願いします。

( 藤本委員 )

総合学科と多部制・単位制はもちろんあります。もし必要でしたらデータを持ってきました。ポツポツあります。それから、全部電話で確認したわけではないのですが、職業科と総合学科と普通科が併設された学校の総合学科は単位制です。職業科はどうなっているのかその辺までは確認していませんが。

( 池上委員長 )

他にございますか。それではですね、次に小池委員からですね詳細な資料を頂きました。ただ、この一部ですねちょっと誤解があるといけませんので私のほうからあらかじめ申し上げますと、場合によれば各区 1 校減ということに対する抵触論にもなるかもしれない。むしろ委員からは次の段階の現行の方法についていろいろご意見を賜っていると私は考えておりますがそれでよろしゅうございますか。小池委員それでは発表をお願いします。

( 小池委員 )

それではデータを読みます。私は前回・前々回と校務のため出席できなかったのですが、話はもう多部制・単位制と総合学科へと、議論が進んでいる中で、前々、前回の北原先生の私案について諏訪（地域）としてはどう考えるかという側面で作成したものです。

一つ目の 1 については、旧第 7 通学区での普通科への進学率、特に普通科への進学が突出しているのではない、というデータであります。これは、平成 17 年度の現場からのデータについてではありますけれども、1 通から割合を出してみました。そうすると、7 区 73.9 パーセント、県平均からするとプラス 2.5 パーセントと高いわけですが、3 区、4 区それから 10 区、11 区、12 区、11 区ですか、これを見ますと、諏訪があえてそんなに高いということではない。そのように理解ができるだろうと思います。

ただ問題なのは、諏訪が 8 区へ行こうが、9 区へ行こうが、やはり、諏訪では、普通科進学について保護者と生徒の要望が強いと言えます。高普通科志向ということですね。やはり、この現実を下げるということは、地域の要望に合わないだろう、と言うことの資料であります。

2 つ目の発展途上校といいますが、北原先生が言われた言葉では「習熟途上校」でしょうか？ 3 校が例示されております。これはある新聞の過去 5 年間のデータの集計を出したわけですが、ずーっと見てみますと、茅野高校は何年かにわたり、募集定員よりダウンをしております。それから向陽高校は、昨年度一ヶ年の定員割れですね。あと、岡谷東も何年かありますね。そこで、平成 17 年度の 3 校の内容を書いておりますが、基本的には生徒数減から見ると、2 学級減の数です。以前から諏訪の場合は、学級減で対応できると話しておりましたが、昨年度数的には 2 学級減で対応すべきところを 1 学級減だけでした。向陽高校についてであります。平成 15 年に下がっています。これは、当年二葉高校が定員を 60 名割るという状況が生じまして、そっちへ流れてしまった結果です。何ゆえに向陽高校に魅力なかったのかはよくわかりませんが、平成 16 年に 23 名落ちこんでいますね。やはり二葉高との関連で翌年も敬遠され、減り込んだという現象という風に私どもは把握しております。

岡谷東についてであります。ここは 3 年ほど定員を割っております。茅野高校共々に

両方に言える事でありますけれども、やはり、ある程度学力が無いと高校生活についていけないわけです。心配される子はやはり落とされている、という状況があります。又、上伊那地区からも約 20 人位ずつ流入しているという状況もあります。

次に流出状況であります、その表の通りであります。特に 2 番目の県内の私立高校、(通信制・サポート校を含むもの)に 20 人行っています。その中では、県立高校へ進路できなかったという子どもが多くなってきています。県外へ 78 名出ておりますけれども、諏訪は特に、東京志向の考え方もありますし、長野県では県立高校に入れないという状況もあるわけで、それがお隣の県に流出しているという現象につながるものもあると言えます。どういう要素で、どの部分が作用して定員割れを起こしているのかについて、又、今後の検証は必要かと考えています。

それから、7 区の場合ですけれども、茅野と岡谷東を見てみるとわかる通り、定数減でも不合格を生じています。郡内の高校には合格できなくて、他県へ出る、という現象です。このことの意味は中学の進路委員会の方ではちょっとわかりませんが、やはり高校としては、子どもがたくさん来てくれるためには、ある程度の学力や生徒指導上に大きな問題があったては人気がなくなりこまる。「うわさ」で、応募数が減るのはこまる、ということかと思えます。特に、茅野と岡谷東にはなやみが大きいと感じています。来た者は何でも入れてしまおう、という風にはならないと思います。では、高校としての魅力づくりをどうするのかという部分、今後の課題かと考える中、両校の定員割れにかかわっては、こういう実情があると言えそうです。

それと、一番上に書いておきました。特に低学力の子どもについてですが、8 区、9 区の場合は、どこへ進学しているのでしょうか？7 区の場合は、山梨とかいろいろあるわけです。電車に乗り 20 分くらいで筑摩高校へ行けるわけです。そういう中で他の 2 区ではどのように低学力生や多様なニーズの子どもたちが位置付いているのかが、ちょっと疑問であります。それから、本郡からも筑摩高校であるとか、塩尻志学館へ行くこともあるわけですが、塩尻志学館の方は学力レベルがある程度ないと落ちこちちゃうわけです。それから、7 区の場合、他の県へ行くこともありますので、筑摩高校へ行く子どもの数は比較的少ないです。行けるには行ける条件にあるわけですが - 。そういう地域条件も考えるべき 1 つの要素になるなと思います。

4 番目の、学級数と子どもの数の関係であります。7 区と 8 区で 100 人しか差がない、論にかかわっての学級数の減数にかかわる問題であります。8 区は歴史的に見て塩筑にも行けるし上伊那もいいし諏訪もいいという立地と意識があります。歴史的・伝統的に見ても、そういうことが言えると思います。われわれの高校の仲間にも上伊那の出身者がいっぱいいるわけです。自郡以外の地域へ相当数の子どもが流出するという事実を踏まえた時、単純に中学校の生徒数の比較とか、100 しか差がないので - というのは、諏訪一校減をという論拠とはならないと考えます。やはり、数的にも県教委の具体的な候補案は論拠がありますし、考え方は妥当ではないか、と私は考えております。

最後の問題として、茅野と下諏訪、岡谷東の内 1 校統合をした場合、人口の現状を考えて行かなきゃいけない、と思うわけです。茅野市は 5 万 6 千です。今も人口が増えています。5 万 7 千なろうかと - 。今後、6 万にもなろうかと思うわけですがけれども、もし、茅野高とどこかが統合し、茅野高が無くなるということになると、5 万 6 千の市に県立高校が

一校もなくなってしまいます。あるのは東海大三高だけです。こういうことはもう地域感情からも許されません。たしかに現状では、茅野高校には、いろいろな事がありますけれど、茅野高校は本来、富士見高校と、同様の地域高校という側面が強いわけです。

それから、距離的問題はそこに書いてある通りであります。駅に近く、距離も近い2校、例として、岡谷の東と工業が一番近いのではないかなとなった時、合わせると12学級になってしまいます。これがうまく分散できればいいのですが、現実にはね。ご承知のように上田高校9クラスです。これは県内最大級です。今後、学級減ということでも議論になるであろうとも思います。また例として、仮に岡谷東と岡谷南を統合し、6クラス規模校にしたらどうだ、それにより、仮に1校を廃止したらどうだ、という乱暴な議論も出される。諏訪の1校減により、諏訪からますます外に出て行く傾向に拍車がかかったら、地域産業であるとか、様々な地域文化育成に大きなマイナスが生じます。

以前の論議の中に、確か、進学高校に行った子どもは他県へ出てしまい地域に残らない、という話があったわけですが、ここに挙げられた県教委案のサンプルにはですね、地域の産業、地域文化の担い手の教育について十分に考えられていると思います。その辺についても大切に考えたいと思います。次に富士見についても考えていただきたいわけですが、先ほど言った問題と併せ、やはり、どちらにひっかかったにしても、人口の面などから考えて問題が生じます。

次に諏訪、7区地域の統廃合の問題の論議についてですが、確かに「まな板」に載せることは賛成ですし、うんと議論をするのは大いに結構ですね。仮にある高校を、多部制・単位制に変えていったらいいではないか、という論議も論理としてあるわけです。しかし、現状の子ども数の推移だとか、今後の生徒数の見通しから考えた時、《先に1校減ありき》の再編統合論には反対するしかない、と思うわけであります。

北原先生の出された案に対して、諏訪の現状をわかっていただき、今後検討していくことを求める案として提案しました。以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。今の中でですね、後段のほうで委員のお発言のところは既に結論がつけてあるというふうな、先ほど冒頭で申し上げましたので、現行論のところでの話を具体的にしようということは結構でございますね。そうでなくて、前の結論に、スタート、というところではないのですね。そういうふうに理解していただかないと、私たちもまあ...

(小池委員)

少なくとも、この間の前々、及び前回の時に、「まな板に載せること」はいいのだけれど、(その中には1校減という選択肢もあるのだけれど)しかし「諏訪を1校減らす」ということは決定はしていなかったですね。「減らす可能性もある」ということだったですね。

(池上委員長)

それは、全ての議論についてもそうなのですが、それを今度はそれがそうではないという結論にすればですね、今まで決まったことの全てご破算にしなければいけないということになりますのでね。

(小池委員)

いいえ。私が言っているのは、話し合いの中で、諏訪もカヤの外ではなく相談しながら考えましょう。1校減ということを検討するという側面も含めて考えましょう、ということとは良いわけです。ただ、諏訪の普通高校を1校減すること、先にありき、という論が、無理ではないか、ということを行っているわけです。ただ新聞を見ると、旧通学区毎1校ずつ、3校削減、となっていますが、あの時に私は、そんなふうに結論付けられたとは認識していません。不参加の前回と前々回にそういうのがあったのなら別ですけども。論議の中で、1校減も視野に入れて考えよう。という結論である。そのように私は認識したのです。だから、こういうふうにお話をしたわけです。

(池上委員長)

冒頭で申し上げましたように、1校減ありきだというふうに認識しておりますので、そういう方向でご検討いただきたいと思います。

(小池委員)

すると、100パーセントそうなる、諏訪の普通校を1校減らすということですか？

(池上委員長)

ええ、今日の議論はそういう方向でやりたいと思います。

(小池委員)

私はそういうとらえ、1校減先ありき、をしていなかったわけです。だから、合意形成に、諏訪1も含めて3つを削減する。の論は難しいな、というのを出したわけですね。

(池上委員長)

最初に、1校減ありきですねと。ただ、1校減ありきの中で具体的な校名を語るにはですね、この資料を参考に十分なるのですねというふうに申し上げたつもりでございます。

(小池委員)

私の方は、その「1校減の可能性もあり」というふうにとらえているわけです。

(池上委員長)

もちろん、可能性もありでけれども。可能性もありといことはこういう会議にですね、では可能性はないかと思うかどうかということはお考え頂きたいと思います。

（小池委員）

私はちょっと違うと思うのです。話をする中で、どうしても諏訪一校減をやらなくてはいけないというのならわかるのですが、ただ、痛み分けのような形で諏訪も1校減らせよ、ということのはめなわけですね。私は北原先生の話を受けてここで始めて、反論と説明の資料を出し、私はこう考えている、生徒数の推移や地域の状況からみて、諏訪の一校削減は不必要だ、県のたたき台案がベターだと、と言っているわけです。

あくまでも当面の話をする中で、1校減の可能性もあり、という立場で、お願いしたいかなと思っています。

（池上委員長）

いや、基本的な前提条件としては1校あり、の可能性なのです。1校ありというふうにお考えいただきたいと思います。

（小池委員）

ということは、私がこの反論資料を出したということも、今となっては意味ないということですか？

（池上委員長）

いや、そんなことはございませんよ。これは議論を申し上げて、議論をする上で参考になるという立場でご発言を頂いたというふうに感じております。

（小林委員）

ちょっと質問いいですか。

諏訪のことは具体的に、参考になったのですが、小池委員に伺いたいのですが、現在、総合学科について方向はとにかくつくろう、設置しよう、それから単位制・多部制もつくろうというふうに一応はそういう方向できていたわけですが、1校のみとかということまではまだはっきりしないのですね。それから、確かに県のたたき台では総合学科については上伊那地区、総合学科については、飯伊地区と示されましたが、諏訪につくってはいけなとか、そういうこともないわけです。例えば飯田、下伊那へ単位制・多部制はつくらないとかそんなことは何もまだ結論でないものですから。先生はご検討された時に総合学科と単位制・多部制についてはどういうふうにお考えになりましたか。

（小池委員）

総合学科については塩尻に志学館があるわけですね。諏訪地区から電車で15分ぐらいですから、諏訪郡内の端から端までいくより近いです。現時点では総合学科は諏訪にはなじまないな、というふうに思っています。ただ、統・廃合ということとの関連でいくと、ちょっと問題が出てきそうです。現実には、諏訪で多部制・単位制の設置についてですが、現に山梨とか他県に出て行ってしまう子どもとか、行き場が少ない子どもたちもいます。だから、そういう子どものために、先ほど藤本先生が言ったような併置というのでもいいかなと思ったりしています。要するに、そのような部分改変は可能性がある、と思うのです。

そういう可能性や、多部制・単位制高校設置の方向を構想するパターンは大切です。ただ、ではどこどこを改廃のかという事ことになってくると、さっきから言っているように諏訪においては厳しいのではないかと、という感じがするのです。

（池上委員長）

心情はわかるのですが、今小林委員仰せのようにこれは、必ず後ろから総合学科、多部制・単位制という問題がついてくることは間違いありません。ただ、それだからといって議論をずーっと引き伸ばすわけには行かないものですから、じゃあ諏訪は「どこと、どこをやりますか」ということをやはりここでおっしゃっていただくと、いうことに相成ると考えて進行しております。

（関 委員）

私も先ほど、小池先生がおっしゃったように、諏訪地区は学級数が減らないということから諏訪地域１校減は、いかななものかと以前から意見を申し上げて来たわけです。しかし、全体の雰囲気やご意見から各地域１校減の可能性もあるということを前提にして議論を進めることは必要かと思います。ただあの時言っていたのは確か結果については、いろいろ検討した結果減にならないということも有りうるということをおっしゃっていたような気がするのですが。

（池上委員長）

間違いなくそう申し上げました。そのとおりだと思います。

ただ、今日のこの時点ではですね、有りきでやはり話を進めないとしても結論に至らないというふうに考えておりますので。大変お立場上、難しい位置だと私もよく認識しておりますので、それはそれで議論していただいて、いうふうに思いますし、今日の進め方としてですね、これから違う方法でもって意見発表も考えています。そのようにご理解いただきたいと思います。

ちょっと、このご意見について、例えば、北原委員のお出しになったデータですね、このことについて、詰めておきたいと思います。

（北原曜委員）

ちょっと、今いろいろ反論があるのですけれど、それはさて置いてですね、一番最後の文章ですね、したがって北原先生の述べられた第７区の普通高校統廃合については反対であるということで、普通科についての問題点はここで議論になっていきますけれども、では、普通高校以外の高校の統廃合についてはどうお考えなのかなと、ここでは具体的に７区について話し合うということでしたので、それについてちょっとご意見をお伺いしたい。

（池上委員長）

お願いできますか。先程の意見について。



(小池委員)

普通高校以外となると、職業科ということですか？

(北原曜委員)

はいそうです。

(小池委員)

諏訪の場合、考えておりますけれども、岡谷工業、諏訪実、それから富士見とそれぞれバランスよく、しかも特質をもった職業高校が配置されています。他地区のように、同じような学校・学科が二つあるということでは無いわけです。そういう点で、職業高校の統廃合という事を考えた時、物理的どのようにやっていくべきか、今もバランス取れているわけですし必要ない、と考えています。それに、少なくとも職業高校でこういう勉強しようという狙いの下に行っているわけです。こう考えた時、諏訪の3校(職業高校)は改廃をする必要はないかと思います。

(北原曜委員)

今回の、高校統廃合についてはですね、どなたでも断腸の思いでやっていると思うんですね、どこの人でも学校減らしたくないですよ。だけれども、ここは涙を飲んで今までの県の財政のこととか、それから少子化の問題とかさまざまな問題があるので、断腸の思いでそう決断を下す、ここは下すところなのですね。それで、1つ1つの高校を見ればそれはみんな大事なのですよ。父兄にしろ、地域の人にしろ。だけれどもここではやっていかなくてはいけないのです。そうなってくると、1減というお話を、ああこれはだめだ、これはだめだ、これはだめだで結局ゼロになってしまうと、そういうことになったら、他の区みんなそうなのですよ。これではまずいと思いませんか？

(小池委員)

今、職業高校という問題が出てきましたので、意見を述べます。岡谷工業は工業科でございますね。諏訪実 は商業科と被服科が一緒ですね。で、富士見は農業科がありますね。こういう職業科の場合、諏訪ではバランスよく配置されていると考えられます。諏訪の実態から、これはやはり、どうしろと言われても、どうにもならないかな、ということなのです。

(北原曜委員)

ということで、普通科の高校を考えて行ったらどうかということで、私はご提案申し上げていたわけです。

(小池委員)

だから、それについては、私の方もいろいろ反論をしています。統合の中で、多部制・単位制というようなことは、当然ちょっと考えていてもいいかな、ということは私も申し上げているわけです。しかしどこどこを統合するか、と言われた時に、現実の中では

非常に厳しい部分があるわけです。私は、先程よりそのことを言っているわけです。

（北原曜委員）

その具体案をお示し願いたいのです。多部制・単位制でいいというならですね。

（小池委員）

先程申したことは、私の頭にちょこっと浮かんだ内容です。やはり、県立高校が茅野市から無くなってしまえば、これは大きな問題になります。今後の検討を経る中で茅野高を多部制・単位制に変換ということの選択肢も十分あるかな、と思います。ただ、それは、その地域の方々の意見や地域との議論などを十分に尽くしきった上で、ということになります。私としては、そういう選択肢も有り得るかな、という感じで、話しているわけです。

特に、他県へ出てしまう子どもをどう考えていくかですね。高校教育と地域の企業とが結びつくようなことは考えておりますが、それでは、どこどこをくっつけてどうしようという風な、イメージが今の時点では沸かないという状況にあります。このような面も含み、先ほど言ったように、私には無理だという思いがあるわけです。以上です。

（池上委員長）

それは職業科の話ですね。

（小池委員）

いいえ。今言ったのは普通科の話です。

職業科の方はバランスよく配置されております。それをどうくっつけるか、減らすかと言っても岡谷には岡工、諏訪市に諏訪実、富士見に富士見の農業科それぞれ伝統校として存在しています。これをこう改廃せよ、となると、その論は不必要な論であるといわざるを得ません。上伊那のように同じ工業科が2校有る、箕工と駒工があるというようなことが諏訪にはないものだから、職業科は対象にならないと私は考えています。

（池上委員長）

そうすると、比重的に考えると職業科は無理だと。ではその2つで言いますと普通科はいいでしょというふうなまあ、あるわけで。

（小池委員）

いいえ。普通科は先程より述べているようにだめですよということ、ちょっと難しいですよ、と言っているわけです。ただもしどうしてもということになればと悩んでいる今ですが -。

（小坂委員）

前決めた議論が逆戻りしてしまっています。

これはやはり将来考えればですね。1校あるいは2校なくなるかもしれない。しかし、現実にですね、例えば私どもの通学区は8校、それから諏訪は9校あるわけですよ。県立

高校。その他に東海三とかですね、私立もある。そういう形の中ではやはり、3区それぞれの特色をもっている。普通に1校ずつということで、話を進めるということを進めたわけではないですか。それでしかも、そういう自己弁護というのですか、諏訪の委員さんはもう6人もいらっしゃるわけですから、過半数ですね。ですから、そういうですね。区ごとの対立になってはまずいと思います。

(小池委員)

私も区ごとの対立は、まずいと考えています。

(小坂委員)

それで、もう一案出して、だして賛成したわけですからね。

(小池委員)

だからね、私の方としては、諏訪の学校を改廃の検討を論じる上での俎上に乗せることは少しもやぶさかではない。諏訪も同じ県立ですからと申し上げています。だけれども、私はあの時点での把握では、諏訪も1校減だ、というとはえはなかったわけです。「可能性はあり得る」という事でのとらえです。今のお話を伺って、1校もあり得る、というとはえから、「一校の削減が決定事項である。」という前提のもとに進められることは、承服できないということです。

(北原曜委員)

各区1校ずつの減という方向でやりましょうと前回「ピン止め」された。そうでしょう？

(小坂委員)

ですから、その小池先生の議論を言い出すとですとね、これはかつまた下伊那は下伊那、上伊那は上伊那で減らす必要ないという議論を出しますよ。ですから、やはり今回はですね、その3区の中でそれぞれ必要はある、あるいは特徴があるけれども各区とりあえず将来は必ずそうだって減にせざるを得ない。今の児童数からいけばですね。推移からいけば、ということで決めたので。それを、議論を1回決めたことを戻してしまうということになってしまうでしょう。

(小池委員)

学級減での対応で諏訪の場合はできますよと、言っているわけです。県のたたき台はどういうものであるかの論議は別にしましても、諏訪は生徒数の推移とか、何人の子どもが残るとか、から考えて、一校削減は不要であると言っているわけです。普通科の場合の統廃合ということについては、多部制・単位制高校等(今後)議論しなくてはならないものはやればいわけです。諏訪の普通高校は、今回の統廃合の対象に、最初からならないのではないかと、ということで、私は資料を提出したのです。

(小坂委員)

だから、それは小池先生の議論の中で今後1校ずつ減らしていくということを、原則として決めたわけですから、それを今ここで覆して議論を戻すというのは、これはちょっとこの委員会の進め方としてはおかしい。藤本先生どうですか？そうでしたよね？

(小池委員)

減と言うことを否定するわけではないですよ。ということは、諏訪も俎上に上がりますけれど、その検討の課程の中で、どうしても1校減というのは考えの中に入れてありますよと。それでいいわけでしょう？

(池上委員)

あのね、結局さきの関委員のおっしゃいましたように、それは完璧に100パーセント絶対ないという話はない。全く認識と違う考え方が出てきて、それは違うとおっしゃれば、あるかしれませんが、99%以上、これはこのようにしていかないと議論が進んでいかないとと思いますが。

(小池委員)

だから、議論を進める前提はわかりますので、それでは諏訪の場合は1校減の可能性もある、ということで論議をしていけばいいのではないですか

(池上委員長)

そういう言い方なら、委員長に申しわけないですが、そういう言い方で言うなら、それは上伊那も下伊那もそういうはずだと私は思います。全くはそうですよ。

(小池委員)

結局、大前提として、論議の前提として諏訪も1校減らせ、ということですか？結果としてそういうことですね？

(池上委員長)

結果もないではないですか。他がね、このことを承認しないでそんな、他も承認しないということで、

(小池委員)

そうしないと結果は、そっちの方(話をまとめる方に)進まないわけですからね。

(池上委員長)

ええ。これだけの有識者が集まってですね、話が空中分解してしまったら後誰がやるのです。

(小池委員)

それは結局、論議の中でということになるわけですね。

これからの論議の中で、はっきり言えば、諏訪は1校減になることもあるし、ならないこともあるということですか？

(池上委員長)

小池委員のようなお話を、ここでしなんとするなら、完全に100パーセントそうです。というふうに私は言い換えなければいけないのです。だから。議論が進んでいかない。

(小池委員)

では、論議の中で100パーセントということは、なし、としていただいてお願いしたいと思います。

(池上委員長)

それは先生。議論を戻すのですか。

(小口委員)

いいですか。

私は基本的に、やはり諏訪地域も学校は減らすべきだと。僕は諏訪の住民だけれども、そう思っているのですね。たしかに、北原先生のように学校を減らすというのはこれは大変なことって、これは前からどんな圧力がかかるかわからないし大変な、同窓会の問題だとかいろいろあるから、それは大人の社会のことを考えるとそうかもしれないけれども、将来にわたってですね、子どもが、クラスが減っていくということに対する弊害、或いは子どもが将来どのような多面的ないろいろな考え方ができる人間に育っていくか、或いは多面的な社会に対応できる人間が育っていくかということを考えた時には、やはり学校は減らしてでもクラス数は多くするというのは私の考えでありまして、その先生のようにクラスを、学校を統合するとクラス数は減るという問題とは違うのですね。学校が1つ減ってもクラス数は変わりなければ、1つの学校のクラス数は多くなるわけだから、そのほうがいいのではないかというのが私の考えなのです。ですから、そのほうが子どもたちにとってはもう絶対いいのだと、いうふうに僕は思っているのですよ。子どもにとってはね。ですから、これからのことはやはり大人たちが、子どものことだけ考えるべきではないかと思うのですね。

(池上委員長)

ありがとうございました。貴重なご意見。

最終報告書なのですね、例えば諏訪でそういう話になってきますと、諏訪でも最終報告書を見ますと、子どもたちの数ですね。こういうふうな立場でいいますと、6クラスのベストの考え方ですねこの最初の年は。そうしますと、今の話でチェックにしますと、おそらく清陵と二葉の各校まあそのあたりから、今の学校はその範疇に入らないという、このようなことなどは、今ここであまり安易にやる気はもうありませんから。

(関 委員)

今ちょっと分からなかったのですが、清陵と二葉というのは。

(池上委員長)

生徒数を集計しているものがありますが、清陵が今日現在 737 名。それから、二葉の 724 名、岡工が 711 名、1 つ下がって岡南が 705 こういう数字を見ると 6 クラスで割り込んできますと、いずれにしても数が、学級数が少ないのだという話になるのですかね。

ちなみに富士見さん 405、茅野が 389、諏訪実が 383、向陽 602、岡谷東 522 とういうふうになっております。私の手元の資料を元に申し上げたのです。

(関 委員)

清陵、二葉、岡工 3 校が、どういうことになるのですか。

(池上委員長)

いや、それは規模論から言いましてね、6 クラス。5.5 から 6 だという話になれば、その範疇から受けていくのだと、数の問題ですね。

小口委員の活性化ということを求めた、学校の在り方ということになると、明らかに最終報告書にはそう書いてありますと、そんな事態は、私はどうかよく理解できない部分もあるのですけれど。

(関 委員)

結局、私の質問に対しては。

(池上委員長)

でなくて、こういうふうになったに思ったものですから。

(関 委員)

いいえ、先ほどの 1 校減の話です。

あの時は私と小池委員が反対したのですけれども、南信全体での議論を進めるためには、諏訪での 1 校減の可能性も含めてということでしたのでね、その前提でとにかく議論を進めましょう。ということで私は理解したのですが。

(小林委員)

今議論になっていること、2 つちょっとクリアしなければいけないかなと思うのです。

1 つはとにかく再編成というのは、前々からいっているように数の問題が、先行してはまずいということはわれわれの大前提です。一番大事なことが、再編成というのが魅力ある学校づくりという点で再編成していくのだと、したがって私さっき言った資料でいいますと、単位制・多部制なんか反対だという議論も確かにあったのですが、こういう魅力ある学校という点で、単位制・多部制にしていっただ場合は、多分子どもたち、または保護者からも皆さんも納得するということで思います。1 つは単位制・多部制にしても総合学科

にしてもつくるということは、つくるべきだという方向ではきているもだけれども、3 通で1校だけにするのかね、本当に魅力、これが、魅力があるから、各旧通学区で1校ずつつくっていいのかどうかというね、もう絶対それは許されないことなのか？もう1校しか認められないことなのか？これによってちょっと諏訪もぜんぜん違ってくると思うのですよね。

それから、下伊那の場合も今度選択が違ってくると思うのですよね。そのことを1つはっきりしたほうがいいのではないかとということ。もう1つ小池先生のこの資料に関係しますと、本当に魅力ある学校づくりについては、単位制・多部制や総合学科をさらにうんと検討してより良いものにしていくという方向は、検討されつつあるのですが、それ以外のさっき言った普通科の統合みたいな形の場合、どういうふうになれば魅力ある学校になっていくという、そういう検討もしていかないと、たたき台のところで出たあの各地域の反対運動が、諏訪で再燃してしまうと思います。ただ、統合するだけではなくて、こういう形で魅力ある学校づくりに、ぜひすべきだという形で提案していかないとまずいので。といって簡単にできることはないと思うのですが、その検討をね、総合学科と単位制・多部制のさらにより良いものにしていく事と、もっと他にどのようなものがあるのかということも検討していくべきです。ちょっと小池先生の案ではただ案作りだけになってしまって、もう当然これを出せば、どこの地域も猛反対になってしまうと思うのですよね。以上です。

（池上委員長）

はい。今の2点の話で、1点は藤本先生の文章の中にも、多部制・単位制もどきに近い学校のものがあったと思います。

最初のご質問のところはですね、ニュアンスとして事務局のほうからちょっとご発言をいただければありがたいです。

（吉江高校教育課長）

まず、総合学科高校と今の多部制・単位制高校、これはあくまでも1校程度というように対象高校になっております。それで、最終報告を受けまして私どもちょっと、多部制・単位制はさておいて、総合学校候補につきましては第4以外のそれぞれの第1から第3までにまずは1校ずつ設置したいというスタンスで考えています。と申しますのは、いわゆる塩尻志学館高校を設置した時に、塩尻志学館に対しての志願者の状況とかいろいろ考えた場合に、方向とすれば総合学科高校というのは、ある程度以上の需要というか生徒さんの希望が高い学校という認識をしておりますが、さりとて、いくつもの乱立という形がはたして好ましいのかというような面もございますので、まずは、各通学区に1校ずつというようなことでご提案申し上げています。それにつきましては、いろいろなご意見あるかと思いますが、例えばこの第3で言いますと、先ほど若干お話が出ましたが、塩尻市との距離との関係とかそのへんも含めてご検討いただいたほうがいいのではないかと考えております。

それから、多部制・単位制高校です。多部制・単位制高校につきましては、私どもの考え方というのが、全日制をまず何校であって、それで全日制的減らすところにそれぞれの通学区ごとにやはりこれも今後の利用状況を考えた場合に、ある程度以上のご希望がある

ということで、まずは各通学区に1校ずつ設置してまいりたい。また、その状況に応じて今後その状況の、いわゆる設置後の状況を勘案した上で今後の対応は考えて行きたいというスタンスに立っています。ですから、それぞれに同じように、複数校の設置というような議論もあろうかと思いますが、必ずしもそれがいいのかどうかという面がありますので、私どもの気持ちとすれば当面各1校ずつということで行きたい。というようなスタンスにはたっております。ただ、他の推進委員会におきましても、例えば総合学科につきまして、2校あってもいいのではないかなという議論もありますし、また反面ですね、むしろ必要なのだというような話も出てきたというような状況です。

(池上委員長)

今のことについていかがでしょうか。

(熊谷委員)

1つこういうのを決めても、私前に言ったのですけれども、今諏訪のほうから諏訪の場合は通学範囲として塩尻が一般。山梨がいいかどうか別にして、そういう選択肢も有ると今話ありましたけれどね。逆に飯田下伊那の場合でいきますと飯田市内の高校へ行くしか選択肢ほとんどないのです。そういうことあるわけで、先日県教委の訂正ありましたけれども、例えば、箕輪に仮に多部制・単位制高校を置いた場合にですね、天竜峡から2時間かかるのですね、下伊那での北端である伊那大島から1時間ですから天竜峡までは2時間かかりますね、天竜峡でもまだそんなに上のほうではないですね。いわゆる極端なことを言えば平岡へ帰るのに3時間かかります。そういったこともあるので、先ほどいろいろな諏訪がどうのこうのとありますけれども、やはり第三通学区というのはそれぞれいいか悪いかは別にして、前にもいいましたが、他の第一なり、第二なりと違ってやはり3つの地域がそれぞれの状況を抱えて存在しているのかなということがあるので、それを頭に入れて話をしないとなかなかうまくいかないかなという気がするのです。ですから、非常に私とすると本当に通学区とするとまず、飯田下伊那中でしか完結できないという宿命になっていると思います。

(池上委員長)

それは、1つの条件として考えていけないといけないというふうに思います。ただ、先ほどの小林委員のご提案の魅力についてでございますけれど、確かに魅力が数の論理ありきという話はまずい。これについては、はそのとおりだと思いますし、ただ、実際問題は、これからこの数の論理をそこそこ煮詰めておかないと、11月、12月で「魅力論」を挙げなくてはいけないということにも相成っておることも事実であります。それとのバランスでどのくらいのいい案が書けるか、衆知を集めて書けるかというところであります。この件について、ご意見ございましたらどうぞおっしゃってください。



(熊谷委員)

魅力ある高校づくりということについて、総論として非常に難しいと思うのです。地域高校は2クラスでも残すと、もう報告に出しているわけですね。2クラスの方でも魅力ある高校をつくるのだと片方で言いながら、片方では小規模校では魅力ある学校づくりは難しいと言っているわけですね。そういう意味でこれ非常に総論として魅力ある学校というのはどうするのか？ましてや、専門高校、普通高校、今で言う多部制高校、総合学部高校とかひっくるめて、非常に総論としての魅力ある学校づくりということで、非常に難しくなるのですね。

ですから、やはり今回の場合もそれぞれが、それぞれのご希望なり、学校の有り方に、したがってですね、学校はそういうふうに行っているのですし、そういうふうになってきているという認識でいいのではないかという気がしているのです。

どうも、その魅力ある学校づくりということで、ひとつじっくりしていないのです。いかがでしょうか。

(小口委員)

各指針はですね、今までの何回かの委員会を通じて思ったのは、やはり非常に子どもが親も社会もそうですけれども、非常に多様性を望んでいると、ところが残念ながら普通学科ではその多様性が取れない。ところが、総合学科のことを勉強するにつけてもですね、総合学科って、非常に多様性が許される、或いは校長先生の権限が非常に大きくなってですね、自由度が大きいと。そういうことの中で、小林先生のほうは多分それを普通高校にも段々総合学制的な自由度を持たせた学校を持っていけるかと、こういう先生お話だと思うのです。現状をなんと言うか法律によって、そういう自由度をなかなか持たせることができないというわけですが、それで県としては、試行として各地域1つの総合学科を持つと。そういう意味では、やはり今後は普通学科の自由度を持たせるのか、或いは総合学科に変えていくのかと。こういう方向が多分この地域の魅力ある学校をつくっていく、そういう方向だと私は思っていますね。

多部制・単位制については、これは総合学科の多部というようなそんな感覚が有るので、そういう意味では先ほど小池先生がおっしゃったような、Cという地域の高校の話が出ましたが、それは非常に面白い取り組みだと私は思います。そのような、要するに学校としての魅力を、自由度をですね、県のほうは持たせてくれる方向であるのか？このほうが僕は大事であると思うのです。要するに校長の権限だとか、或いは地域と共同してやっていくようなそんな学校づくりを持たせる方向にあるのか？この辺が大事だと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。かつては、小林委員がそれを、我々は議論して我々が結論をつくるではないかと。こういうご提案がございましたけれども、確かに、そのような県のご意向も伺っておかなくてはいけないと思います。

(吉江高校教育課長)

ある意味で、小口委員さんからのご指摘の、今までは場合によりますと各学校の自由度というのは制約されていたかと思うのですが、しかしながら、今回最終報告に出ておりますのが、これ1つの例としてお考え顶きたいのですが、コミュニティ・スクールという議題でございます。これはいわゆる学校運営協議会というようなものを設置いたしまして、その中で皆様方から頂いたご意見を受けて、それから学校長がある程度学校運営をその協議会に拘束される内容となっております。ですから、1つの流れとすれば、普通科にコース制等を導入したのも1つの流れかと思えますし、また、さらに今後はこれから広がっていく。また、専門高校におきまして、学科再編等は逐次私ども実施しております。この地域はこのような形で改革プランとの検討とは別個にやっておりますが、そのようなものにつきましても、今後1つはいわゆる学校の関係者の方々のご意見、さらに学校長、さらには学校の職員という教員の意見を聞きながら、方向性ができればそれは基本的には学校の意味で変えていく。また、そういうものをコミュニティ・スクールに代表されますように検討していくというような方向で考えています。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。そろそろ中間の時間になりましたけれど、特に冒頭小池委員のほうからご意見ございましたが、大変苦渋の、また、大変難しいところでご発言いただいておりますので、心情をよく理解いたしました。これからもそういうことたくさんあると思いますが、申し上げましたように、その論議を展開していますと、ずっとまた、続いてってしまいます。これはいれていただいて、もう1校ありということで後半の時間を費やして行きたいと思えます。ぜひご協力をお願いいたします。

それでは、ちょっとお時間を10分ばかり頂いて休憩をしたいと思えます。

#### 【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、再開をいたします。

後半は、各地区の各校というところに、ますます厳しい議論に入っていきたいと思えます。

まず諏訪7区から議論をいたしたいと思えますが、ここで議論の方法なのでございますが、各校を消去法かなにかでやるか、いや違う案を議論いただくかということに、なってくるかと思えますが、どのような方法でやっていきましょうか。

(藤本委員)

ちょっといいですか。

どうも最近の委員会はあまりに急ピッチで、私はついていけないんですが、12月にまとめるというのがわれわれの頭の上にぶら下がりすぎている。第1回、第2回委員会でわれわれはかなり議論して、横におられる小池委員さんが、第1回では「検討して3校減がゼロになったっていいのですね」と発言されましたが、数自身たたき台であり、5.5は5

と6の中間ということでできた数です。12月がいよいよ目の前にぶら下がってくると、後4回ということになる、最後の1回、2回は報告書の文章の修正か、まとめということになる。これは12月は無理です。

私は前半はあっけにとられていたのですけども、これでいいのか不安があります。課長さん、どうでしょうか、12月というのは。ばたばたしすぎて、議論についていけない。それでも12月というのであれば、議論について行かざるを得ないと思いますが。

(池上委員長)

お答えいただけますか。

(吉江高校教育課長)

今、そのようなご意見を伺いましたが、ほかの委員会を含めてそれぞれの委員さん方がお忙しい日程をお繰り合わせいただきまして、ほかの委員会でも申し上げたんですが、私を感じておりますのが、それぞれの推進委員会にお集まりの14名の方、非常に公務等あるいはお仕事、非常にお忙しい日程を差し繰りあわせていただいて、月に2回ずつ参加していただいていると思います。

それぞれ今日の前半の議論もある意味、大変大きな議論をいただいていると思っております。確かにいろいろご発言はありましたが、今まで私どもの方で全くお出ししてなかった内容を、それぞれの委員さん方が、議論をいただくということで、そういう意味で非常に重要な1時間半だと思っております。

またその展開の中で、単純に申し上げますと11月、12月ではございますが、5月の29日の第1回の推進委員会の時にも、申し上げた経過がありますけれども、場合によりまして、1月の初、中旬まで含めてご検討をいただきたいと、申し上げた経過がございました。その中でぜひ今まで同様の慎重な審議を、いただきまして可能であればお進めいただきたいと思います。

(池上委員長)

藤本委員、今の課長の回答でいかがでしょうか。

(藤本委員)

県会の答弁で職務代理者は1月ということをちらちらと言っておられるので、1月というのも可能性あると思い発言したのです。ここで委員長さんが「それでは消去法でいきましょう」ということになってしまうと、あれほど5.5も75校もたたき台だと、小池委員さんの第1回委員会での発言を覚えていますが、皆さんも、私も発言しました。

1月中旬でもさして変わらない、県会の白紙撤回を求める決議があったのですから、午前中の議論では腰が落ち着かない。もうひと踏ん張り、1月などと言わないで遅くできないでしょうか。

(池上委員長)

お答えないですか。

(吉江高校教育課長)

私どもといたしましては、先ほど申し上げましたように、ほかの委員会も含めて今現在、本当にご熱心にご議論をいただいておりますので、まだまだ議論の経過でご判断いただきたい。

(小坂委員)

私も藤本委員の意見に賛成なのです。私はとても無理だと思います。これだけ短期間に両論併記なり、大して期待のできない答申ならいざ知らず、これほど具体的な方向性を持った報告書を提出するには、とても私は委員長さんの発言は、無理だと思います。そんな短期間で結論を出せと言っても、まとまる話しではないだろうと、私はそんなふうに思っております。

ただ今日、議会の皆さんと話し合いがあると思いますが、議会も県議会のときもそんな空気なので、それは成り行きでほかの地区の委員会とも、歩調を合わせていかなければいけないでしょうが、少なくとも私は、現在の委員会の中で、これですんでしまうというのは無理があると思います。

(熊谷委員)

ここに私どもが委員会でも行きました、視察があるわけですね。7月27日、11月3日、11月7日、8日ですか、志学館高校や松本地区が県内の高校なんかは、視察の必要があるならばもっと早くやったほうが、よかったような気がするのです。

これの提案を見させていただいて、最初の視察があるのは11月8日ですよ、それですぐ結論を出さなければならないわけです。何のためにこの視察があるのかと、これをもう少し早めにされているなら結構ですが、「本当に視察もやりました、なにもやりましたから結論ですよ」というあれでしょ。言ってみれば経過づくりをするために何かしたような気がしてしょうがないので、今小坂委員がおっしゃったとおり本当に12月でいいのという疑問があります。

ただ逆にいうと、12月と言われているから実は飯田、下伊那では12月といえば飯田、下伊那としましては、もう研究会をつくりましたので11月には飯田、下伊那としても研究会の方向性を、しなければいけないのではないのと、ばたばたしているわけですね。その部分は並立してあるという、非常に複雑な心境にあるのは確かです。

(池上委員長)

実は私も複雑な心境でございまして、今の視察の話もまだ固まっていないという、事務局から情報をいただきましたので、私も申し上げたのです。私の認識でいえば、視察あたりはもうちょっと早いほうがよかったのではないかという、まったく同意見でございまして、個人から申し上げるとこれは学校を見てこなければ、先生方は学校にずっとおられるわけだけど、われわれは学校を見たことがないのだから、そういうふうなアクションが先行するんだな、と私は思っておりますけど、これは委員長としては、どうしても期日まで結論を出したいと思っておりますが、今の吉江課長の話だと半月猶予ができそうというご発言で、これ以上詰めてもなかなか難しいので。それより議論を先行させていくよりほ

かに、ないのではないかと考えておりますが。今日の発言は、随分重くなるから。

（小林委員）

感覚的にはちょっと厳しいなと誰でも思っていると思うんですが、もう少し話を具体的にするために、ちょっと提案をしたいのですが。みんな本当に12月に、まとめられるのかどうかというのは、大問題だと思うのです。

それでまず今、委員長さんから出た、では具体的にどうやって対処法を考えているかということが大事だと思います。消去法にするかと言ったことで、なにか単純にしてやるというふうにとらえられていますが、私はそういう意味で、委員長さんは言ったのではなくて、どういう手順で考えていくかということがないと、いきなりどの学校にするかなんて、とてもできないといわれたのだと思うのです。

例えば第3通学区全体で、諏訪をみんなで考える。上伊那を全体で考えるというやり方をするか、まずグループをつくってそこで徹底的にやるか、やってそれから全体のところへ出して、全体で検討してもらうというやり方をするか、そのグループにやるにしても全体でやるにしても、例えば諏訪はどこにするかという、上伊那はどうするのか議論するのか、それともいろいろと難しい所があるから、1校の対象でなくても3つくらいサンプルをつくって、さらに検討をするとか、いろいろな方法が考えられますね。その方法論についてある程度、みんながこんなやり方でやっていきましょうということによつては、本当に12月末ではとてもできない。

またはもっと違うやり方で単純にこういうふうにやってしまえばいいと、みんなが賛成すれば全然話しが違います。そのこのまずことをどういうふうに進めていくかということ、私はこれがとても今、大事だと思います。例えば、そのこの具体的なことについては、いわゆる公開にするのかということもあるでしょう。

みなさん学校名を出すと、非常に大変だと思うんです。そのこのところをどうするのかという問題もあると思うんですよね。そのこのへんのところをみんなで一致させたときに、後どのくらいの期間が必要かと、いうのが出てくるのではないかと思いますので、そのこのへんについてかなりの時間をかけてほしいと思います。

（池上委員長）

そこまで言うのなら、どういう方法をお考えでしょうか。そこをお示しいただきたい。

（小坂委員）

ちょっと提案です。

先日の市長会の総務文教委員会でも、話題になりました。われわれが例えば諏訪の皆さんが、「では1校どこにするか」ということは、これは委員としてなかなか上げられないと思います。例えば、この様な中で案を上げることは非常に困難であると思います。具体名を挙げれば、その委員へのよくわかりませんが具体的な個人攻撃になってしまいますので、これはぜひ県教委にもう一度たたき台を出していただく。私は、これは一番いいと思います。

それはなかなか委員で、どこの高校を減らすべきだとなかなか言えないと思います。た

但至少とも第三通学区ではひとつずつ取り敢えずは上げていきたいと思います、一端はそういう結論が出ているのですから、今度は県教委がでは公平に見て、県教委の考え方として具体的なたたき台を出してもらい、私はこれが一番いいと思う。それについて議論を深めて合意があればその方法に従って、委員会としての意見を出すということです。

（池上委員長）

今ご意見の私もごもっともな、ご意見だと思うのですが、これが始まったところで候補案が出ました。そこで早すぎるのではないかというご指摘があって、特に議会議員の皆さんが、こぞっておかしいなというお話だったと思うのです。これを進んでいきますと、そういう問題を誘因してしまいますので、私はもうちょっと議論していった後で、それをもうしても感覚でとらえているのです。県の方でご意見があれば教えていただきたい。

（吉江高校教育課長）

今、小坂委員さんからお話でしたが、私どもの考えから申し上げますと、基本的に今回は候補案ということで、6月24日にお出したものが、大前提であると考えております。さりとてこれが、変更がありうるというのは、各委員さんにお伝えしたとおりでありまして、これをひとつの言ってしまいますと、検討していただく上での触媒に使っていただいて議論をふくらませていただきたいと思います。

その議論の中で今回の第三推進委員会におきましては、私どもの案とは、意味で全く異なる内容になっていると思います。第7、第8、第9で各1校ずつという形に変更になる。

それはある意味8回、9回議論したというよりも、7回の議論した中でこういう話が出来上がってきたと思っておりまして、こういうような案をお出しいただいた、この委員会の中で、7区はどうされる、8区はどうされる、9区はどうされるという議論をさらにしていただきたいということが適当かと思います。

（池上委員長）

そういう含みを大変重要なお立場にある、小坂委員がおっしゃっていますので、またそういうことを蒸し返すかもしれませんが、今日の時点では、議論の方法論について先ほど私も申しあげましたし、小林委員からも具体的なお話をいただきましたので、そのところを進めていきたいと思います。その問題をまた後ろに延ばして。

どうでしょうか。

（藤本委員）

前回の総合学科と多部制・単位制が決まった時点から私は、はらはらどきどきして、議論になかなかついていけないのですが、今の委員長さんの「それでは消去法で」という発言にショックを受けて、「えっ」と思ったのですが。

前回ご提案したように、諏訪は地域の声をあまり聞いておりませんが、飯田・下伊那、上伊那は地域の皆さん、グループの皆さんがいろいろ検討されているように伺っている。ですから、消去法だと言われても、たぶん委員長さんはそういう意味で言われたのではないと思いますが、我々も広く皆さんのご意見を聞きながら、俎上にのせながら、議論をす

ることが、先の小林委員さんに発言にプラスして重要ではないか。消去法でと言われても、本当に困ってしまいます。そういう進行方法はどうか。

（池上委員長）

ある意味では議論をしてきましたので、ただ校名についてどうだ、こうだという議論については確かにそうだと思いますし、消去法だと申し上げると、例えば地域校をどうするのかといった場合、地域校を残すのだということになれば、この前に総論として大体その方向で認識いただいておりますので、ある意味でそれは消去法ベースで、そのことは議論から外れていきますねと、例えばそういうことを申し上げているのです。そういうこともあるのではないかと思います。

そうすると「地域高はどこだ」とそういうことになる。地域校は3校か4校かということになれば、それを除いたもので検討という方法もございますので、そういう方法も一つとしてあるなど、本当は本音としてはそうなのです。

（小林委員）

藤本先生の意見にちょっと付け加えて、確かに今までの過去の雰囲気はたたき台を出したときに、県にもものすごい反発があって今も、どの程度かわかりませんが、残っているのは事実なんです。一方では違う雰囲気もありはしないかと、ちょっと予測を立てているんです。

対象ではない学校で、実はうちでも総合学科にするなら、うちでも検討してみたいという学校があるかもしれない。それから一応たたき台で名前が出ているところで、ただ反対だけではなくて、検討していることもあるかもしれない。

そういうものを、われわれ委員が何も知らないで、ただどの学校にするかというのは、ちょっとやり方が無謀だなと思うので、そういう方々のご意見を、できるだけこの推進委員が把握してこの学校ではこういうことを今できるだけ考え合っているというのを、出し合っていくことも入れていかないとまずいかなと思います。

つまりわれわれが、ここの話し合いで決めていくのではなく、だからそういう意味で、下伊那で前々からいっているという意見を聞くということは、ただ漠然として一般論という意見として聞くだけではなくて、具体的に、「あなたの学校でどんなことをお考えですか」ということを、お聞きしてそれぞれのプランがあるかもしれない。ただ反対だけじゃないかもしれない。そういうものをここで出していく、そういう時間もほしいというふうに私は思います。それをわれわれが、やらなければいけないことだと思います。

以上です。

（熊谷委員）

下伊那では、部会の設置をお願いして、まあ部会の設置はなくなったので、逆に地域のことをまとめてくれば聞きますよ、という話しがあったものですから、すでに研究会を立ち上げて、先ほどいいましたように11月中ごろ、できれば中ごろまでには合意までいくか、できればそれを委員会に反映するような形で、まとめたいと思いますので、地域を挙げて話が始まっていますので、逆にここで下伊那のことをいろいろ言われても、ちょっ

とまってくださいよと、地域の人に一生懸命話しをしておりますとしか話にはできないと思っておりますし、将来それで行こうよと、ほぼすべての関係者に周知しまして、一応寒い時期に入って今立ち上げていますので、その場で議論したものでこちらで入り込むという形でいきたいと思っているのです。

（小坂委員）

それを前提で、下伊那も1校削減するということでもいいですね。それを前提ですね。どうも下伊那は、ちょっと私はニュアンスが違うと思ったのです。

それはどうもちょっと若干下伊那のニュアンスは、私は違うというふうに思っている。ここで決めた前提として例えば、以前、分科会を設けるというようなことをいいましたね。下伊那では提案がありました。だけど今の形の中は、若干どうも下伊那は全く減らさない、というような議論が先行しているようなので、その辺のところを確認しておきたいのですが。

（熊谷委員）

研究会そのものは設立されたばかりなので、前提なしで検討するという集まりです。私も委員3人は、当然この委員会の雰囲気や意見を反映するつもりでいますから、もちろん委員3人の立場として意見を、反映するということで、ご理解いただきたいと思います。

その結果を、こちらの委員会に反映するようにもってきたいということで、進めておりますので、あえて前提については申し上げませんが、そういう下伊那としては、最大限努力をしたいということでスタートしたわけです。

（池上委員長）

ぜひ委員会にうまくリードできる案に、よろしくお願いいたしますと思います。

今、小林委員から具体的に検討の方法について、もう少し多くのご意見を、うかがえないでしょうか。そういうふうなご意見もございますし、そのほか進め方について、ご意見を賜りたいと思います。

いかがでしょうか。

（小口委員）

1校減というのは、もう各地域、納得はしているような雰囲気なんですけども、たぶん問題は、総合学校をどこへもってくるかということと、多部制・単位制がプラス1ですから、それをどこへもってくるかという議論があるわけで、まずその辺をどこに配置するということを置きながら、どういうふうにもっていくかということを、ひとつ考えを進める上で、大事なのではないかなというふうに思います。

（池上委員長）

小口委員個人としては、どういうふうなお考えなのか。



(小口委員)

できましたら、大体それぞれがマイナス1ですが、多部制・単位制のプラス1は、どの地域だということを決めて、あるいは総合学科も決めておいて、その後ではどこをどうするというふうに決めていった方がいいような気がするのですけど。

(池上委員長)

先に多部制・単位制をどこに置くか、どこに地域に置くかということを先行して、各地域の現行はそのあと決めるという、こういうご意見ですか。

(北原曜委員)

多部制・単位制と総合学科の件と、1校減という話はそれぞれリンクしているので、切り離してしてはなかなか難しいと思います。それで私つくづく皆さんにお願いしたいと思っていることは、手のうちを見せてほしい。

結局ここはオープンの場合ですから、難しいと思いますが、自分の私案をそれぞれ見せていただきたいと思うのです。このオープンの場合で見せられない場合には、委員長あてに提出してほしいと思うのです。まずはそれが大事なのではないでしょうか。

(池上委員長)

そういうご意見でございますが、いかがでしょうか。いよいよそういう意味で難しい領域に入って来ました。

(熊谷委員)

飯田、下伊那ではこの問題が、起きたときから官民上げて組織をつくったりいろいろしているのですけど、諏訪、上伊那というのは、変な話し、下伊那では下伊那案をつくろうという気になって、しゃかりきになってきていますので、へたに私の立場でいろいろ言えないのですけど、諏訪や上伊那はあくまでも委員方が、自由に発言して自分の私案を、つくっていい環境にあるんでしょうか。どうなんですか。

(小池委員)

諏訪の場合は、そういう下伊那みたいな組織は、できていないからいいんですけど。ただ、さっきも数的に言った通り、数的に見ていると諏訪の場合は減らす必要がないわけです。そうでしょう。多部制・単位制など課題はあるんですが、先程言ったように、総合学科は塩尻にあるわけです。塩尻に行くのは15分で行ってしまいます。多部制・単位制や総合学科と地理的条件等の側面の中で、私は今日、諏訪の1校減というそういう必要は、全くないよ、という論を出したつもりだったのですが、このことは、もう決まったことだから言うな、ということでしたので非常に不満を感じています。

そこでさっきの、地域高校ということです。諏訪は富士見、茅野も一応入るけれど、その中で富士見高校は外す、茅野高校も外す、「残された中で削減はさあどれだ」といわれたら私は、高校名は言えないですよ。

できたら諏訪なら諏訪の委員さんが全部集まって、じっくり検討をするとか、私の考え方とすれば、減らす必要ないところで、何で1校削減をやるのか、どうにも納得できない

と思う中ですが、「決まったこと」ということだそうですので、そう言うならぜひ、諏訪は諏訪で考えさせてほしいと思います。それぞれがデータを集めながらということが必要ですし、又、それがないと私は、この後どんな方法というよりも、一言も口を開けない状況となりそうです。

（小林委員）

前半の方は小池先生の意見に賛成なんですけど、北原先生のおっしゃっていることはわかるけど、いきなり試案ということを考えられる人は、どのくらいいるんですかね。

いきなり委員長さんの方へ試案というのは、なかなか難しいと思うので、試案そのものは例えば、私が諏訪のことも下伊那のことも、とてもそこまではできないから、やるとすれば地元のところの試案ぐらいは考えられると思います。あくまでも構想ですがね。

だけどこれもさっき言ったように、地元の方たちがどういう考えか聞きながら、やらないとまずいかなということで、私案そのものはどっちみちそれぞれが、ある程度もっているものではないのですが、いきなり委員長さんの方へ出すのではなくて、小池先生がおっしゃるように、そのグループで自分たちの私案を、出し合ってもっと揉むというか、そうすることがまずはひとつかなと思います。

そうすると、そこまでもう一度顔を突っ込んで聞くことになると、その辺ならグループで自由になんか意見を言えて、これはあくまでも最終的には、「グループではこういう考えですよ」という形なら小坂市長さんのおっしゃることに多少近づけるのかなと思います。

私が、「高校減らした方が、統合した方がいい」というのは、市長さんがおっしゃるとおり、とても勇気がいるし言いにくいことでありますので、もし北原先生のことと小池先生のことを含めてやるとすればもう少し研究する時間をどうしても必要なのです。

その研究する時間を保証しながら「何時までにそれぞれの私案をもって、各地域ごとにこれはこう考える」、「これはどうなっている、わからん」とか、いろんな意見が出て来るんですね。その中で地元ではどう考えているのか、意見を出し合ったりしてもんでいくという時間が、どうしても必要かなと思います。

以上です。

（関 委員）

小林委員さんのご提案のグループでというのは、こういう場で分かれて傍聴する方がいて、そういうグループですか。

（小林委員）

いや。グループというのは、前の部会と誤解をされてしまうのですが、部会ではなくてそこは各地域ごと出ていますね。諏訪も6人ですか。上伊那の人たちが、さっき私案のことを言いましたが、私案をいきなり出すということは、不十分なところもあるし、するので私案をもってくるのもいいんですが、まず各地域のグループで、しっかり検討をしたほうがよくはないかと、ただその際に傍聴の人たちを、どうするのかと言うことは、私は言えません、はっきり言って。顔を突っ込んで何をするのか、その辺は委員さんにお任せです。以上です。

( 関 委員 )

そういう観点からすればグループだって、具体的に言いづらいではないですか。従って公開かどうかが問題ですね。

( 小林委員 )

公開した場合ね。した場合はそうだと思うんです。

( 藤本委員 )

多部制・単位制が 180 度変わって、検討委員会をもうけることから、設置の方向ということが決まったが、いろいろ議論はありましたが、私は単独校には反対で、少なくとも、定時制を残して併置でやるべきと言ったのですが、最終的に決定づけたのは吉江課長が「飯田ではすでに十分検討をして、多部制・単位制に対して地域の要望がありますよ」言われた発言である。そしたら熊谷委員さんが、「そんなこと聞いていませんでした」と、小坂委員長は「上伊那には少なくともないですよ」と言われましたが。

われわれはやはり、先ほど小林委員さんがいわれたように、地元と話しをするのは大変なので、この検討委員会でもいいので、声を汲み上げて、われわれが地域の声を無視してこの中で議論してもまずいと思うので、まず第一段階として、声を聞くことが必要ではないか。委員長さんが言われるように、二葉や清陵はのこしてといった感じで決まってしまうのも困るので発言したわけです。現実には、飯田・下伊那地区では議論があるということでした、だからそういう地域の動きを話し合って、どういうグループが良いかわかりませんが、併置校もしくは多部制・単位制高校が 1 校は必要かなと思います。

( 池上委員長 )

ありがとうございました。

そういたしますとまとめると方法として、しかしながら基本的に後、数回しかこの委員会をもてないですよ。そういう環境でございますけど、この間にお忙しいと思いますが、また地域別にお集まりいただいて、別の時間で。ご調整をいただくという多分時間軸になると思います。

要するに常に 11 月の頭にあるとすればその前にご調整をいただいて、ご意見をまとめていただくということになります。

そういうことでよろしゅうございますかね。そう長い時間、考えているわけにいかないものですから。

( 小林委員 )

ちょっと今ところ、よく聞き取れなかったですが。さっき視察、私はこれ万難を排して行くつもりでいたんですが、いつだかわからないと、おっしゃいましたね。

( 池上委員長 )

だから内容が、固まっていないという立場から今、発表できないのですけど。

(小林委員)

これは無理して日を空けたのだからちゃんとやるなら、やってほしいと思います。

(池上委員長)

それはいかがでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

視察は、固まってもらっているということをお願いしてあります。

(小林委員)

それでせっかく初めてわれわれ全員が、いつ行けるかわかりませんけども、その後もし11月に、もう1回とるというのは大変だと思うけど、せいぜい後こういう会というのは1回しか取れないと思うのです。4回なんてとても取れっこない。そうすると11月の中旬か下旬に、さっきいったグループというか、あたりにそういうふうにおっしゃったのですか。

(池上委員長)

私は、視察が固まっておられませんというふうに、私も理解をしていたものですから、これはうかつに申し上げることはできないなということで説明をしました。

それから委員会も月に2回ぐらいのペースではかっている。時間軸を考えるとその間、そういう地区の提案をするとすれば、その間に時間をとって、本当にやらなければいけないのではないかとこう思うのです。どうでしょうか。

(小林委員)

ちょっとそうしますと視察が2回で11月。そして今言ったグループ1回、委員会2回。これは厳しい。少なくとも視察は2回は、できるだけ出してもらって、まずグループの会議は、やっていただくことにして、それ以上はちょっと厳しい。いろいろ自分たちで案をもう少し整理する時間も必要になっていますので、あんまり12月ということに、とらわれなくて今の11月に何ができるのかな、ということで考えていただきたい。

(池上委員長)

吉江課長がおっしゃったのが、申し訳ないですがお出しいただくぎりぎりだと思ったんですよ。それぞれの議員さんや市長さんもおっしゃってことはその点はわかるんですが、時間軸から考えれば私もそうだと思うのですが、それを責任をもっておっしゃっているかどうかは、私にはわかりませんからね。

われわれに与えられた時間は12月のエンドをとにかく目指し、遅くとも1月の半ば、これはどうやらよさそうだと、それ以上は待てないよという認識をいただいておりますから、そうすると今の議論をするには、相当厳しくやっていかなければならないと、こういうふうに思っております。しっかりと時間調整をしていかなければ、いけないと思います。ということで考えておりますけど、駄目ですかね。時間がからいってもほとんどこちらの仕事に投入せざるを得なくて、駄目ですかね。

ではちょっと例の視察の所を、時間割を説明願います。

（野村主幹教育支援主事）

10月27日ですが静岡県静岡中央高校の視察をご案内していると思いますが、よろしいでしょうか。

それから11月1日及び11月8日に、松本筑摩高校及び志学館高校の視察がございます。11月4日に、群馬県の方の新田暁高校と群馬県立太田フレックス高校の視察がございます。以上でございます。

（吉江高校教育課長）

今の日程でそれぞれすべての56人の委員さん方に日程の確認はさせていただきましておりまして、現時点においてそれぞれの日において出ていただける方々も、お返事もちょうだいしているところでございます。

子どもは先ほどご意見をいろいろいただきましたが、かねてより教育委員会にも多部制・単位制と総合学科高校については、いろいろな経過についての資料は、お示ししめてご理解をいただいているというのが大前提でございます。

ただかしながら、今回県議会におきまして、なかなか実際に視察すると良さを再認識したというものもありますので、ぜひ推進委員の皆さんも参加したらどうかというご要請がありまして、それでこういうようなものに、いわゆる予定を組ませていただいたしたいです。そんなことで当然ながら、今までいろんな資料をご覧いただきましたが、基本的にはご理解が進んでいるという理解をしております。

（池上委員長）

私も百聞は一見にしかずということでは早いのではないかと考えているところです。資料をたくさんいただいてもなかなか理解するのに時間もかかり、それは大変だということ側面があって、むしろ視察の方が良いのではと申し上げていた課程があります。

そうしますと今、地区別にご議論いただくということは、おおむねご賛成いただけますか。特にございませんか。市長、よろしゅうございますか。

（小坂委員）

私も前に、下伊那の皆さんに部会を設けるといった際に、それぞれの地区にといいますか、部が決まったら部会設置をという発言をしてありますので、それはそういう方向でいいのではないですかね。

（池上委員長）

一番難関のところを、みなさんのお時間を取れるかということがございますが、これは万難を排してなんとかお願いをしたいと思います。ということにさせていただいてそういう方向で調整をしたいと思います。それでよろしゅうございますか。

それでは、まだ若干時間がありますので、時間がある限り、また不調かもしれませんが、どいわゆる地域高の問題を、いったん固めておきたいというふうに思っておりますが、

それを先生方がおっしゃると思いますが、今まで地域高と黙されている学校は、われわれの認識ですが、阿智、阿南、それから高遠、富士見。今、小池委員がおっしゃるように、茅野がそういう感じかなとこういう所なのですが。そのほかご意見を拝聴しておきたいのですが、いかがでございましょうか。

といいますのは、地域高は存続がやむなしというふうに、私どもがはなからそういうふうに皆さんが、考えていただけるだろうというふうに思って先般もご提案いたしましたけど、いかがでしょうか。

（藤本委員）

地域高については、4回か5回の委員会ですでに結論が出ているのでは…。

（池上委員長）

地域高というのは認識では、学校サイドのおっしゃる地域高と地域高の定義が、今の話し「茅野は地域高ですか」という話しになる。

（藤本委員）

阿智、阿南、高遠、富士見がかなり議論された、4回か5回の委員会あたりで、「やむを得ない」という発言があったかもしれませんが、一応存続ということで。新たに富士見ではなくて、茅野ですか。

（池上委員長）

いやそういうご発言も、ありましたが。

（藤本委員）

その辺の学校については一応残すということがほぼ決まったと思ったものですから。

（北原曜委員）

確か、藤本さんのおっしゃるとおり阿智、阿南、富士見、高遠の4校が地域高という定義で、存続するという方向で「ピン止め」されたはずですよ。

茅野の件ですけども、これは別にそれは話しが出ていなかったのですが、ちょっと私も、分析をしてみたんですけども、茅野と諏訪と下諏訪の中学校卒業生は、それぞれ7区の中の高校へ行っているわけですが、その比率が結構似ているんです。

茅野は確かに、茅野の中学卒業生の16パーセントが茅野高校へ行っているのですが、後は非常に清陵に14パーセントとか二葉に15パーセントだとかで、そのパーセンテージは茅野と諏訪と下諏訪とほとんど同じなんですね。ですからこれは地域高と言えるのかなと、茅野地域は諏訪、下諏訪と同じような感じで7区の高校に分散していつているんですか。その分散割合はほとんど同じだということなんで、ちょっと言えないんじゃないかなという気がしています。

(小池委員)

歴史的にも考えて、地域高校か否かは、十分理解、確認されたものだとは承服していませんが - 。先ほどの、阿智とか阿南とか高遠、富士見からすれば茅野高校が地域高校というのは、ちょっと違う部分があるのかなとも思います。ただ、先程の「ピン止め」の4校ということで、よくわからないけれども、「地域高校は枠外」というのが、どういうものなのかナー。とも感じます。特に6学級以上の学校は進学校と言われているのはわかりましたが - 。改廃の対象となる高校は、進学校と地域高校のすき間の高校でという格好になるのでしょうか？どうなんだと言われても私にはわかりません。

(池上委員長)

後段の方は別に議論したしたわけではないです。その地域高についていかがでございましょうか。地域高として、はっきり掲げておきたいのです。

(小池委員)

だから、これが地域高校の定義なんだ。共通の理念があり、数字的にも納得できるものが必要かと思います。納得できるような地域高となれば、それは地域文化の伝統校として、少しも反対はしないわけですが、何となく「地域高校らしい」ということで枠外に、ということでは、よくわかりませんし問題に思います。

(池上委員長)

それだから、阿智、阿南、富士見、高遠というところでよろしゅうございますね。ということで確認をしているところです。

(小池委員)

それは良いのですが、地域高校はこういう枠だよ、という部分は、説明があったほうが良いなと思います。なぜ地域高校は残すのか？県の方にも、「地域高校という確たる定義」がないので、よくわからない部分があります。

(池上委員長)

それは委員のところで詳しく調査いただき、どのような学校を地域校というかをむしろご提案をいただかないと、学校でおっしゃっている地域高とはちょっと違うのは、私もわかるんです。地域高とは何ぞやというのを、おっしゃっているのは茅野あたりでまた同じ話が出るのかもしれない。

(笠原副委員長)

いわゆる地域高校協会というのがありますよね。それに加盟しているのが、阿智、阿南、高遠、富士見それに松川も入っているはずですね。地域高校協会というのに、入っていないですか。

入っていないとすれば一応その4つだと思います。

(柳澤教育主幹)

今お話がございました、地域高校協会に加盟している学校が19校ございますが、この地域でいいますと、今、拳がった4校に箕輪工業が入って5校が、いわゆる地域高校協会に入った学校ということでございます。

(池上委員長)

ありがとうございます。

具体的にそれは、今のお話しは、阿智、阿南、富士見、高遠これが今回のお話しの対称でございます。いうふうにさせていただきます。それでよろしゅうございますね。

茅野は違うという認識でよろしゅうございますね。

先ほどの、じゃあ地域高はそういうことで結論を得たということでいいですね。消去法は随分拙速だというご意見でしたが、今のお話しで地域で議論をやっていくということはそれで結構だと思いますが、そのほかご提案がありましたら、それだけではないよというところをお話していただければありがたいのですが、いかがでしょうか。

よろしければ、それはそれでいきたいと思います。ちょっと時間があれですが、事務局、では今日はこの議論でよろしいかったですね。

(吉江高校教育課長)

それぞれの地域で、ご検討をいただくというお話しであれば、その会の持ち方はちょっとお決めいただいた方が、いいのかなという気はいたします。ひとつは来月以降のご日程について、また推進委員会をいつ開くのかそれはまたあらためまして、皆さんのご日程をちょうだいしたいと思います。それとは別にそれぞれの推進委員会の皆さんが、言ってしまうと3カ所といたしますが、3地域に分かれて議論をいただくということになりますと、その場の設定とかあるいはその場の決定内容といたしますか仕方といたしますか、その辺もございしますので、その点は議論をしていただきたいと思います。

(池上委員長)

はい。今の話しの中で、これもしっかりしておかないといけないと思うのですが、公開、非公開の問題です。これは今の議論の中で申し上げますと、地域の皆さんのご意見を拝聴するということは、ご存知だと思います。

どうもこれは、非公開でやらないと、まとまっていけないかと思っております。その点はいかがでございします。

(小池委員)

いいですね。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。



( 藤本委員 )

この議論は公開であって、非公開ではできないと思います。

( 池上委員長 )

非公開はできない。

( 藤本委員 )

公開が原則であって、非公開を今から地域ごとに決めてしまうのはいかがかと思います。ベースはあくまで公開であって、非公開を今から決めるのは疑問です。

( 池上委員長 )

疑問ではなくて反対ということですね。

さあ、いかがいたしましょうか。

( 熊谷委員 )

すみません。第9の場合は、もうルールをつくってスタートしているので、それでいいですね。

( 池上委員長 )

それは公開でおやりになっているのですか。

( 熊谷委員 )

公開でやりますが、必要によっては非公開でやることもあるかもしれません。

( 小坂委員 )

この会の持ち方いかんじゃないですか。全体から例えば地域の皆さんとか、あるいは高校の関係者から聞く場合は公開で、具体的に校名を絞った場合は、これはとてもじゃないけど私は公開はできない。その場合は非公開でやってもらう。公開でやった場合は、あの人はどう言ったということが出るんですけど、会として、部会としてまとめていけば、それでいいのかなというふうに思っています。

( 笠原副委員長 )

あくまで原則は公開で考えていただいて、やむを得ないという場合は非公開とすればおかがですか。

全部公開だと決めてしまうのも、難しいと思うので、委員が必要と認めた場合は非公開にする。

(池上委員長)

わかりました。ではそうしましょう。

あとは持ち方として各地区例えば、諏訪なら諏訪、上伊那なら上伊那、下伊那なら下伊那でということで場所を設定する、そういうことでいいですね。

(小池委員)

集まった委員の中で、後で一応決めればいいのかではないですか。この場で集まって、この日なら空いているよ、ということで -。

(池上委員長)

そうですね。

委員さんが6、5、3だね。下伊那3人しかいないけども。

(熊谷委員)

今日は1人ですから、だいじょうぶです。

(池上委員長)

では極端な話しその調整を、例えばこれから10分間でやるということにさせていただくとありがたいと思います。その前に次回のことについてちょっと事務局からお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

今のお話しと少し変わるかもしれませんが申し上げます。次回の予定につきまして、今のところ11月7日の月曜日になりますか、午後を目途に考えております。従いましてまた今のお話しの中で、委員長さんと相談であらためてご案内を出すことになるのかなと思いますので、今のところ、11月7日の月曜日の午後というふうに、ご理解をいただきたいと思います。

(池上委員長)

はい。ありがとうございます。

それでは本来ここでなんですけど、今の地区のお話しを、ちょっと5分か10分いただきたいと思います。

これでいったん今回は終了したいと思います。ありがとうございました。

(小林委員)

ちょっと今の事務局からの話ですが、7日にやるといっても、部会というか、グループの会をその前にやらなければ意味がないと思うのです。その間にやるというのはものすごい視察が、続いている中で私だって本当にやきもきやってきたからね。

どうしても今の推進委員会をやるというなら、かなり後へもっていてももらわないと、グループだってそんなに簡単に、もう一度やり直しということは、一斉にこれで結論が出ましたということはありませんよね。中間報告くらいもできるかどうか分からない

ことがありますので、ちょっと7日はむちゃだなと思いますけど。

（野村主幹教育支援主事）

今日そういう話しになると思いませんでしたので、今のところ予定をそうしておりますと、ですのでこの後のお話しによって委員長さんと、また相談させていただいてというふうに申し上げたわけでございます。

（池上委員長）

それではそういうことでよろしく願いいたします。